

大坂城跡 IX

学校法人追手門学院による
建設工事に伴う大坂城跡発掘調査報告



2008.6

財団法人 大阪市文化財協会

ごあいさつ

追手門学院は、1888年(明治21年)大阪偕行社附属小学校として発足し、第2次世界大戦後の再出発に当たってその立地する大坂城の正門にちなんで「追手門^{おうてもん}」という校名になっております。

本学院は、2008年の創立120周年記念行事の一環として追手門学院小学校の西館を建て替えることになり、多くの遺構をかかえる敷地の発掘調査を(財)大阪市文化財協会に依頼して実施しました。本書はその報告書です。数々の出土品から古い歴史を有する土地であることが立証されました。発掘調査や報告書作成の労をとられた方々にお礼を申し上げます。

私どもは由緒ある大坂城三ノ丸跡地で学べることを誇りに思っ、今後一層努力して参りたいと思っております。

追手門学院長・大学長 鈴木 多加史

例言

- 一、本書は大阪市中央区大手前1丁目の学校法人追手門学院による建設工事に伴い実施した発掘調査(OS07-11次調査、OSは大坂城跡を示す略号)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は学校法人追手門学院が負担した。
- 一、発掘調査および本書の作成は、財団法人大阪市文化財協会文化財研究部次長南秀雄の指揮のもと、同部学芸

- 員池田研が担当した。また、石垣石材の鑑定については同部学芸員小倉徹也が担当した。
- 一、調査に際しては、大阪城天守閣館長松尾信裕氏よりご助言を賜った。
- 一、発掘調査で出土した遺物、その他の資料はすべて当協会が保管している。

凡例

- 1. 遺構名の表記は石垣(SW)、土塋(SK)、溝(SD)、その他の遺構(SX)の分類記号の後に、通し番号を付している。
- 2. 本書で用いた北方位は座標北で、座標値は世界測地系に基づく。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いており、本文中では「TP+○m」と記している。
- 3. 本書で用いる中・近世の時期区分は、大坂本願寺が創建された1496(明応5)年から焼亡した1580(天正8)年までを大坂本願寺期、本願寺焼亡から大坂城三ノ丸築造開始の1598(慶長3)年までを豊臣前期、三ノ丸築造から大坂夏ノ陣の1615(慶長20)年までを豊臣後期、大坂夏ノ陣以降を徳川期とした。
- 4. 「大坂」・「大阪」の文字は、原則として明治維新までは「大坂」を、以後は「大阪」を用いた。
- 5. 本書で用いた地層・土器の土色は新版標準土色帖[小山正忠・竹原秀雄1998]に従った。

目次

ごあいさつ

1. これまでの調査	1	3-3. 包含層出土の遺物	15
2. 調査に至る経緯と経過	2	4. 石垣の石材について	20
3. 調査の結果		5. まとめ	24
3-1. 基本層序	4		
3-2. 遺構とその遺物	6		
i) 豊臣期の遺構	6		
ii) 徳川期の遺構	11		

1. これまでの調査

調査地は上町台地の北端に当り、1598(慶長3)年から翌年にかけて造成された大坂城三ノ丸の北辺部に位置している(図1・写真1)。調査地周辺ではこれまでに徳川時代大坂城外郭関連石垣遺構発掘調査団、追手門学院校地学術調査委員会、大阪府教育委員会、(財)大阪市文化財協会などによって、おもに大坂本願寺期から徳川期にかけての調査がなされてきた(図2・3)。

まず、大坂本願寺期の遺構としては、大阪市文化財協会によるOS83-15次調査(冒頭に「OS」を付した調査は大阪市文化財協会によるもので、以下では調査主体の記述を略す)で礎石建物・溝が、OS90-58次調査で大川の護岸に伴う石垣が検出されている[大阪市文化財協会1988・2002]。豊臣前期の遺構としては、OS90-58次調査地で大川の護岸を、また大阪府教育委員会による4次にわたる大阪府立女性会館(ドーンセンター)調査[宮崎泰史1993・黒田慶一2005](以下、「大阪府教育委員会調査」とOS06-7次調査[大阪市文化財協会2007]では、武家屋敷や南北方向に延びる道路などを検出している。一方、OS83-15次調査地から大阪府教育委員会調査地にかけて約150mにわたって検出された東西方向の石垣は、前述した武家屋敷などが埋立てられた後、三ノ丸造成時に築かれた石垣と考えられる[大阪市文化財協会2002]。造成された三ノ丸内では1980年の追手門学院による調査(以下、「追手門学院調査」)で廃棄土壌が[追手門学院校地学術調査委員会1982]、OS06-7次調査では建物・区画溝・柵・井戸・廃棄土壌・道路などが検出されているほか、大坂夏ノ陣の焼土層が各調査地で見つかっている。徳川期の遺構としては1975年の徳川時代大坂城外郭関連石垣遺構発掘調査団による調査(以下、「徳川時代大坂城外郭関連石垣遺構発掘調査団調査」)で大川の護岸に伴う石垣が[徳川時代大坂城外郭関連石垣遺構発掘調査団1977]、OS88-78次調査で淀屋^{こあん}の屋敷の一部とみられる礎石建物が[宮本佐知子1989]、追手門学院調査やOS06-7次調査では石組遺構・礎石列・井戸などが検出されている。



図1 調査地位置図



写真1 調査地から南東方向に大阪城を望む

2. 調査に至る経緯と経過

今回の調査地は大阪府教育委員会調査地とOS88-78次調査地の間に位置している(図2)。調査地の北端は、両調査地で検出された豊臣氏大坂城三ノ丸北辺の石垣の延長線よりも2.5mほど南にあり、調査地全体が三ノ丸の範囲内に収まるものと予想された。本調査に先立つ大阪市教育委員会による試掘調査の結果、現地表下3.2mで豊臣期から徳川期にかけての地層や遺構が分布していることが確認されたことから、本調査を実施することとなった。本調査では東西16.4m、南北8.2mのほぼ方形の調査区を設定し、南北に基準杭を打設した。まず、現地表面下3.2mまでを事業者側が重機で掘削し、12月25日からは人力掘削を開始した。人力掘削に当っては、攪乱を拡張し、調査区中央部には南北方向の中央トレンチを、東部には南西-北東方向の東トレンチを設定し、地層断面を観察しつつ掘削を進めた(図4)。調査の進展に伴い、調査区北部では当初の予想に反して石垣の裏込め石とみられる礫群が、東西方向に帯状となって検出された。石垣が壊されて崩落した裏込め石を除去しながら、石



図2 調査区配置図

垣の前面(北側)に堆積した徳川期の地層を掘削したところ、桶を利用した水溜め遺構や土塀といった遺構のほか、陶磁器・瓦・木製品など多くの遺物が発見された。

続いて石垣本体を検出した結果、石垣が北側に面をもち東西方向に延びていること、東トレンチより東側には延びず、西端は調査区外に続いていること、根石を含めて2段分が残存していることなどが判明した。本調査で検出された石垣は東西調査地の石垣の延長線よりも南側に位置しているが、共通点が多く見られる築造方法や、石垣の前面に分布する地層の堆積時期などから、それら豊臣氏大坂城三ノ丸北辺の石垣と一連のものと判断した。石垣の全容が明らかとなった1月23日には現場の見学会を催し、多数の小学校教職員の参加を得た(写真2)。その後、石垣の石材を鑑定するためのサンプルを採取するとともに、中央トレンチをTP+3.4mまで掘下げて、石垣のベースとなる盛土層の堆積状況を観察した。1月29日には基準点測量を実施し、31日には調査に関するすべての作業を終了した。

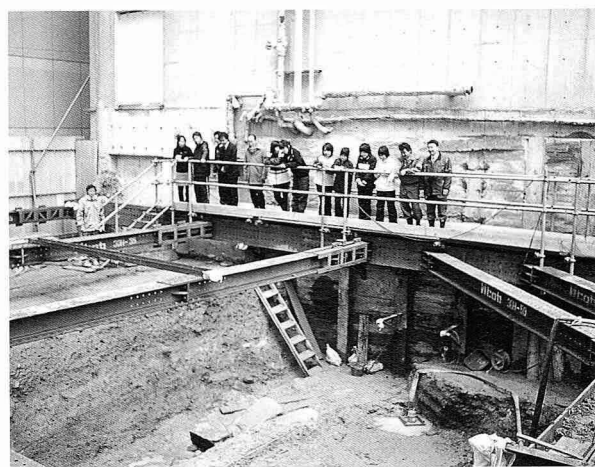


写真2 見学会風景

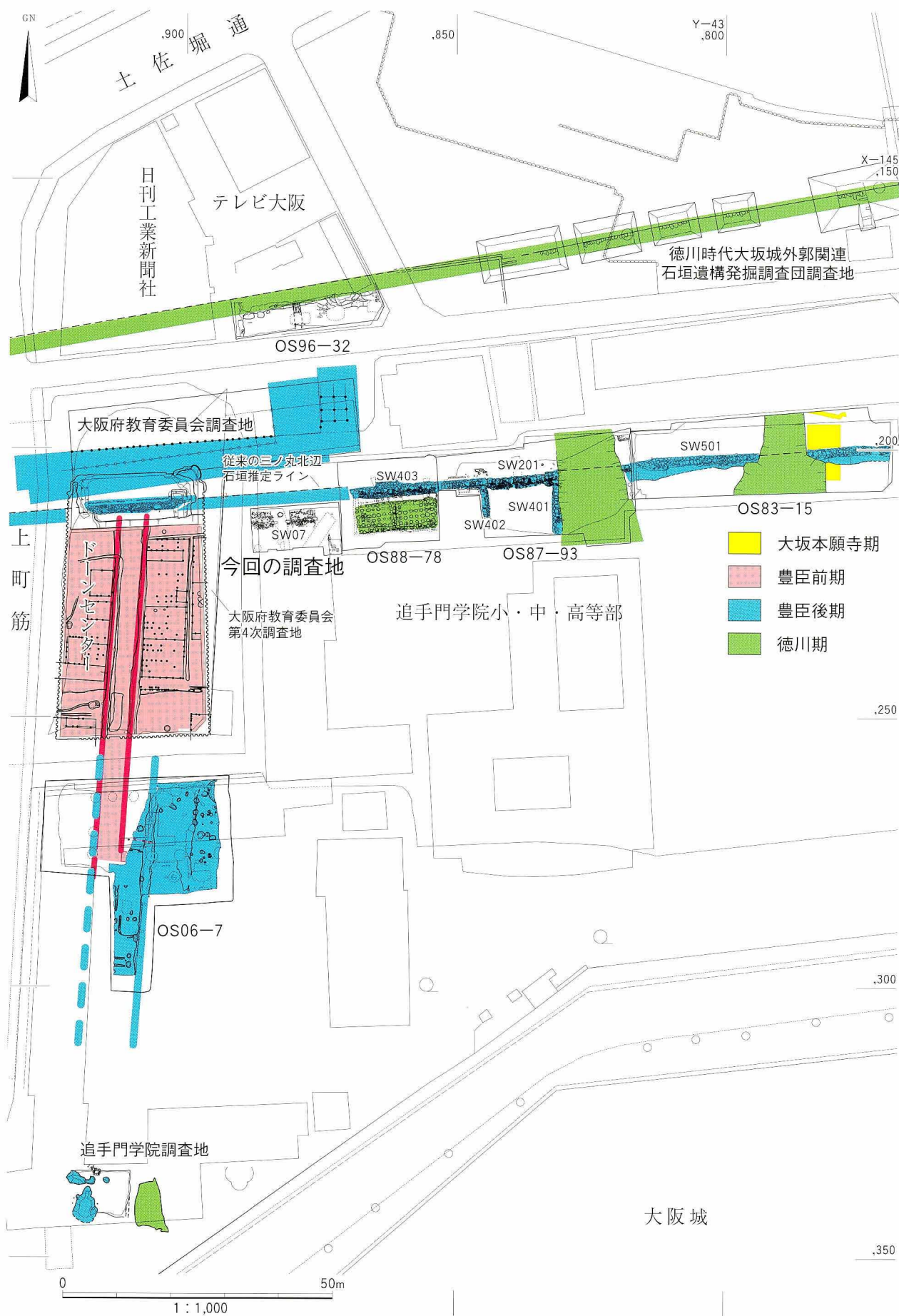


図3 大坂城北辺の各調査と検出された遺構群

3. 調査の結果

3-1. 基本層序

南北方向の中央トレンチ、南西―北東方向の東トレンチを設定し、地層断面を観察した。基本層序は以下のとおりである(図4、写真3～5)。

第0層：灰色(5Y4/1)極細粒～極粗粒砂質シルトを主体とする現代盛土層である。

第1層：にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト質極細粒～細粒砂を主体とする整地層で、調査区東部に分布している。炭化物・礫を含む。

第2層：黄灰色(2.5Y4/1)極細粒～極粗粒砂質シルトを主体とする整地層で、調査区東部に分布している。炭化物・礫を含む。

第3層：にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒～極粗粒砂を主体とする整地層である。シルト偽礫や崩れ

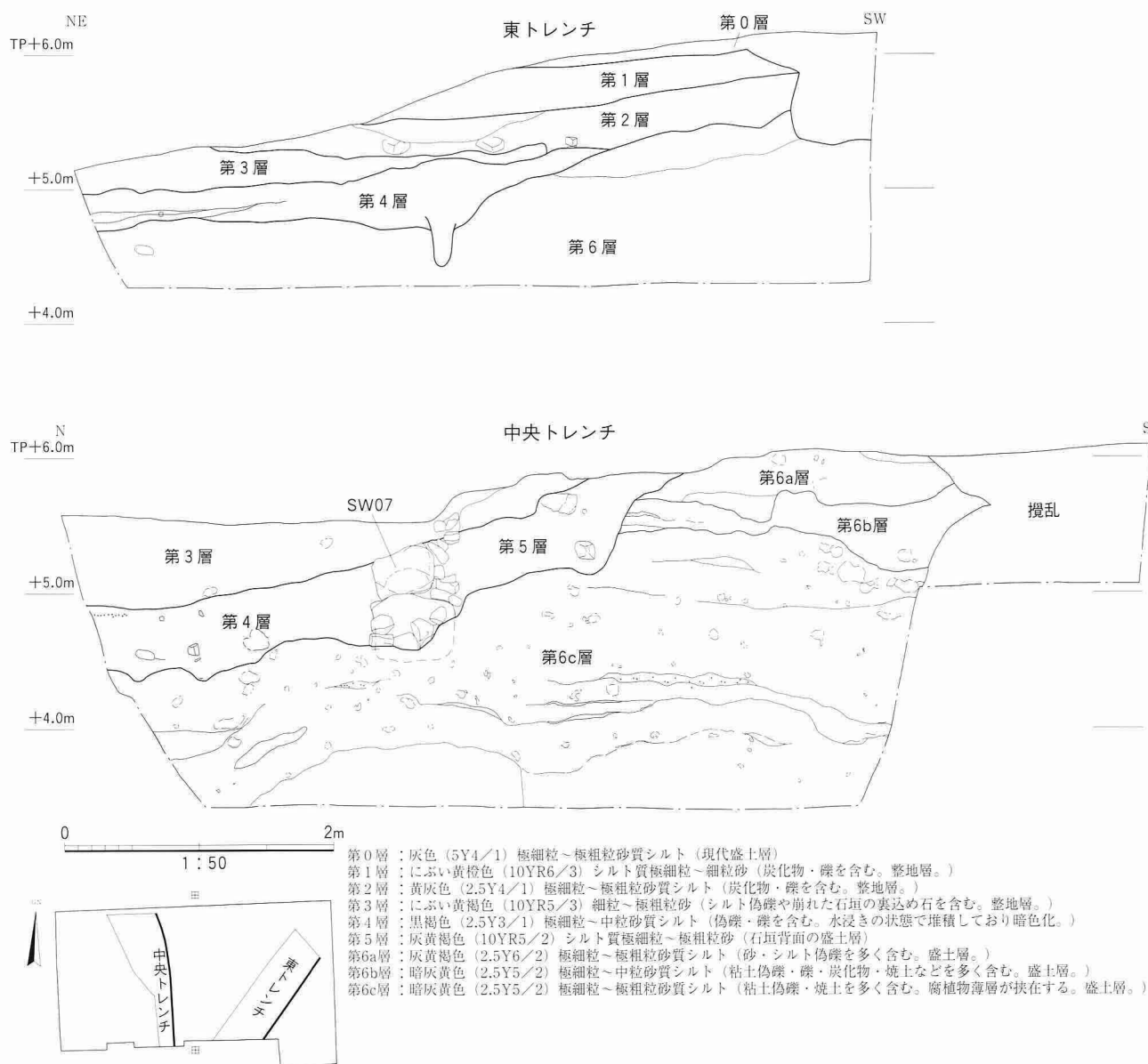


図4 東・中央トレンチ地層断面図

写真3 調査区全景
(西から)

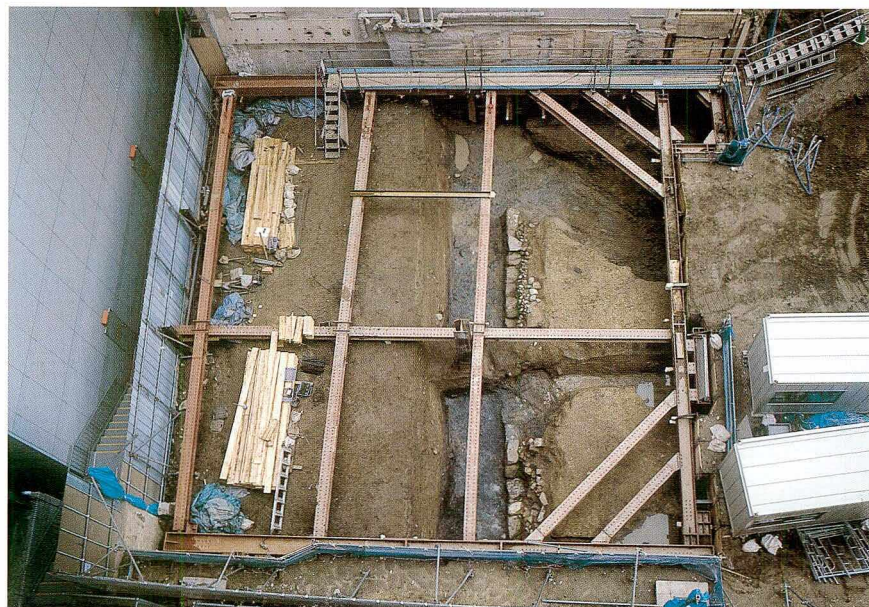


写真4 中央トレンチ地層
断面(西から)



写真5 東トレンチ地層
断面(北西から)



た石垣の裏込め石を含む。

第4層：黒褐色(2.5Y3/1)極細粒～中粒砂質シルトからなり、偽礫や礫を含む。石垣前面の水浸きの環境で堆積したとみられ、暗色化している。本層の層内や上面では水溜め遺構や土壌が検出されているほか、陶磁器や木製品など多くの遺物を含んでおり、頻繁に人が入込んでいたようである。OS88-78次調査の第6層に相当する。

第5層：灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極細粒～極粗粒砂を主体としており、礫を含む。石垣背面の盛土層である。

第6層：石垣のベースとなる盛土層で、OS88-78次調査の第7層に相当する。厚さは250cm以上あり、第6a・6b・6c層の3層に細分される。第6a層は灰黄褐色(2.5Y6/2)極細粒～極粗粒砂質シルトを主体とし、砂・シルト偽礫を多く含む。第6b層は暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒～中粒砂質シルトを主体とし、粘土偽礫・礫・炭化物・焼土などを多く含む。第6c層は暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒～極粗粒砂質シルトを主体とする。上部では粘土偽礫・焼土を多く含む。腐植物薄層が挟在しており、盛土の休止面が存在した可能性もあるが、広範囲には拡がらない。

3-2. 遺構とその遺物

i) 豊臣期の遺構

調査区北部では石垣SW07を検出した(図4～6、写真6～9)。SW07は北側に面をもち、中央トレンチを挟んで全長12mにわたって東西方向に延びている(以下、中央トレンチより東側をSW07東半、西側をSW07西半とする)。東トレンチより東側ではその続きが確認されず、後述するとおりここで一旦、石垣が途切れていた可能性が高い。一方、SW07は調査区西端まで続いており、西は調査区外に延びている。図6は残りのよいSW07東半の立面を図化したものであるが、石垣石は大部分で2段分が残存しており、高さは1.1m程度である。2段目の上面の標高の平均はTP+5.3m、根石の基底面の標高はTP+4.5m程度である。裏込めの厚さは0.2m程度と薄く、裏込め石は少量である(写真8)。裏込め石の上端の標高は南側ほど高く、もっとも高い部分でTP+5.8m前後ある。南から北に向って傾斜をつけながら裏込めを掘削し、石垣を崩したとみられ、石垣の前面(北側)には裏込め石が散乱していた(写真6)。SW07東半の観察結果によれば、根石は小口の幅が0.2～0.7m、奥行は0.4～0.6mあり、2段目の石は奥行0.3～0.5m、小口の幅が0.3～1.0mある。石垣は不整形な自然石を利用した石垣石と目地石により構成されており、石材鑑定の項で詳述するとおり、石垣石には花崗岩と砂岩が使用されていた。また、視認できた範囲ではそれらの石に矢穴や墨書・刻印などは確認されなかった。一方、裏込め石は直径0.1m前後の栗石が多く、目地石と同様に石英やチャートを含む多様な石材が使用されていた。これらの石垣石や裏込め石には煤が付着し、火を受けた痕跡の見られるものが含まれていたが(写真9)、石垣石の裏面や裏込め石の表面を中心にそうした痕跡が観察されたことから、石垣が構築された後、戦闘により被災した結果とは考えにくい。そのほか、裾部の排水を目的としたとみられる溝など、石垣に附随する施設は検出されていない。

周辺の調査では豊臣氏大坂城三ノ丸北辺の、東西方向の石垣が総延長150mにわたって検出されて



0 5m
1 : 80

SW07
第4層内・第4層上面遺構

図5 遺構平面図

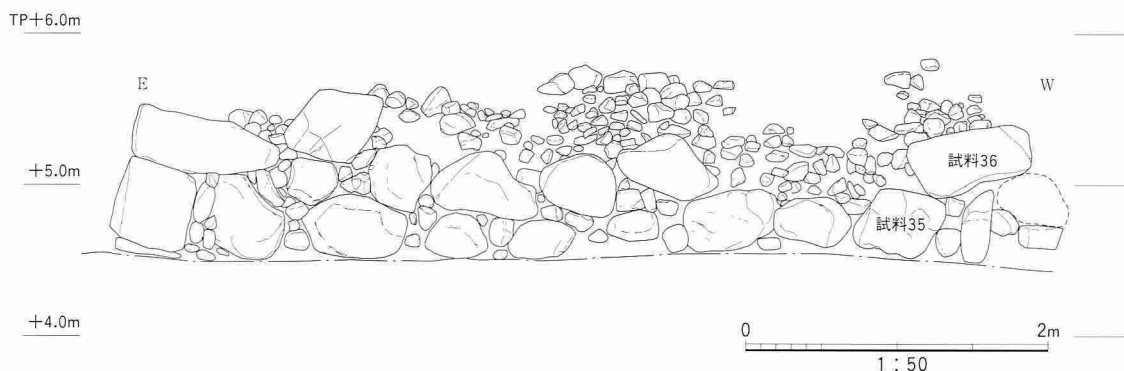


図6 SW07東半立面図

おり(図3)、以下では位置関係や築造方法などからSW07とそれらの石垣との関係について検討する。まず、豊臣氏大坂城三ノ丸北辺の石垣に関する既往の調査成果を整理しておきたい。

調査地の東隣のOS88-78次調査地で検出した石垣SW403は全長16mあり、高さ2.5mで、7段分が残存していた[大阪市文化財協会2002]。最上段の上面の標高はTP+4.7m、根石の基底面の標高はTP+2.0m前後である。石垣石は0.4~0.7mの自然石を多く利用しているが、矢穴のあるものも存在する。石材は花崗岩が多く、花崗閃緑岩・流紋岩が混る。産地は六甲山系と生駒山系とみられる。裏込め石は石垣に近い辺りで0.10~0.15m、奥に積まれた石が0.2~0.3mの大きさである。また、SW403の前面には石垣裾部の排水を目的としたとみられる施設として、矢板を使った溝SD402がある。

OS88-78次調査地の東隣のOS87-93次調査地では、SW403に続く石垣SW401・402・201を検出した[大阪市文化財協会2002]。1598(慶長3)年から翌年にかけて築かれたと考えられるSW401・402は調査地の中央部で南へ直角に折れ曲り、12mの距離を置いて向い合う。SW402の前面には石垣裾部の排水を目的としたとみられる石組溝SD401が検出された。このように石垣が折れ曲る空間は三ノ丸への進入路として設計されたものと考えられている。SW201はその後の工事によって造替えられたと考えられる東西方向の石垣で、折れ曲っていた部分が直線的に改修されている。SW401・402の東西方向に延びる部分では5段分が、SW201では3段分が確認されており、上端部の標高はTP+5.0m、下端部の標高はTP+3.2m程度である。SW401・402の石垣石は0.4~0.7mで、SW201は1mを超える大きなものが使用されている。

OS87-93次調査地の東隣のOS83-15次調査地ではSW501を検出した[大阪市文化財協会1988]。石垣石は大部分で3段分が確認されており、0.3~0.9mの不揃いの自然石を使った野面積みである。最上段の上面の標高はTP+5.0m、根石の基底面はTP+3.8m程度である。根石は2段目以上の石より0.15m前に突き出ている。石垣石は花崗岩と安山岩からなり、花崗岩は生駒山系と六甲山系のもの、安山岩は大阪府茨木産と生駒山産の2つの説がある。一部の石垣石の表面には墨書が確認された。一方、裏込めの厚さは0.4~0.8mで、裏込め石は一辺0.2~0.4mの安山岩や花崗岩を用いている。

今回の調査地の西隣で行われた大阪府教育委員会調査では、第1次と第4次の調査で一連の石垣が検出されている[大阪城天守閣1993、宮崎泰史1993]。調査結果は一部が公表されているのみで、図3には第4次調査地で検出された石垣が図示されていないが、石垣の全長は約25.5mである。今回の調査地に隣接する第4次調査地では4~5段が残存しており、最上段の上面の標高がTP+4.4m、根

写真6 SW07検出作業と
崩れた裏込め石の分布状況
(北東から)



写真7 SW07近景
(北東から)

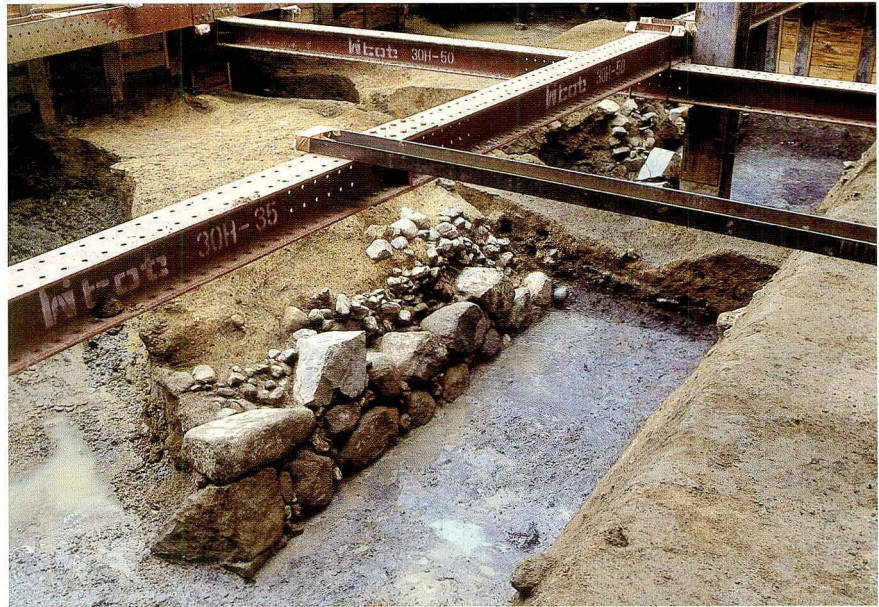


写真8 中央トレンチ西壁の
裏込め状況(南東から)(左下)

写真9 裏面に煤が付着した
石垣石(南から)(右下)



石の基底面の標高がTP+2.4mで、前面(北側)の地表面はTP+3.3m前後と推定されている(註1)。第1次調査地の石垣の断面を見る限り裏込め石は少量で、厚さは薄い。第1次調査地の石垣石は花崗岩が主体で、丹波層群砂岩は用いられていなかったが、第4次調査地の石垣では丹波層群砂岩が多く用いられていた。

既往の調査の検出されたそれらの石垣とSW07を築造方法の面から比較すると、改修されたSW201を除いて、いずれも0.3～1.0m程度の不揃いな自然石を主体とする野面積みである。花崗岩だけでなく、砂岩など他の石材が石垣石に使用されている点も共通しており、特に西隣の大阪府教育委員会第4次調査地の石垣とは石材構成が近似していた。裏込め石の大きさは0.1～0.4m程度で、大阪府教育委員会調査地をはじめとして裏込めの厚みは薄い。一方、徳川期の石垣は基本的に長方形の花崗岩の切石を積上げたもので、石垣断面を調査したOS07-12次調査[大阪市文化財協会2008]や徳川時代大坂城外郭関連石垣遺構調査などの結果を見ると、裏込め石は多く、厚い。こうした点を踏まえると、築造方法の面ではSW07は豊臣期に築造された石垣の特徴を示しているといえよう。

続いて地層の年代では、石垣のベースとなる第6層や、築造時の盛土層である第5層からは、後述するとおり豊臣期よりも降る時期の遺物は出土しておらず、築造方法からみたSW07の年代と矛盾しない。他方、東西調査地で検出された三ノ丸北辺の石垣の延長線より南側に位置していることから、SW07が三ノ丸築造よりも古い段階に築かれたものである可能性もある。しかしながらそのばあい、SW07の前面(北側)には三ノ丸築造時に、新たな石垣を築くための豊臣期の盛土層が堆積しているはずであるが、調査で確認された第3・4層には17世紀中葉頃の遺物が含まれており、こうした考え方には矛盾が生じる。このようにSW07は既往の調査で検出されている豊臣氏大坂城三ノ丸北辺の石垣と一連のものである可能性が強いと考えられるが、両者は南北方向で約5mのずれがあり、両者が接する部分の形状について検討する必要がある。

西隣の大阪府教育委員会第4次調査地で検出された石垣の東端(X座標値=-145,209.2 Y座標値=-43,893.3)(註1)と、SW07の西端との間の距離は東西5.8m、南北4.8m程度である。SW07の西端は調査区外に続いていることから、両者をつなぐ南北方向の石垣がその間に存在する可能性がある。一方、SW07の東側は攪乱を受けており、続きの有無を確認することはできなかった。また、東トレンチの東壁では攪乱を免れた調査区東端部分の地層断面を観察し、SW07のベースとなる第6層や、その前面に堆積していた徳川期の地層である第3・4層の続きを確認したが、壁面や調査区東端にかけての平面でもやはり石垣の痕跡は確認されなかった。他の部分と異なり、SW07の東端部では根石

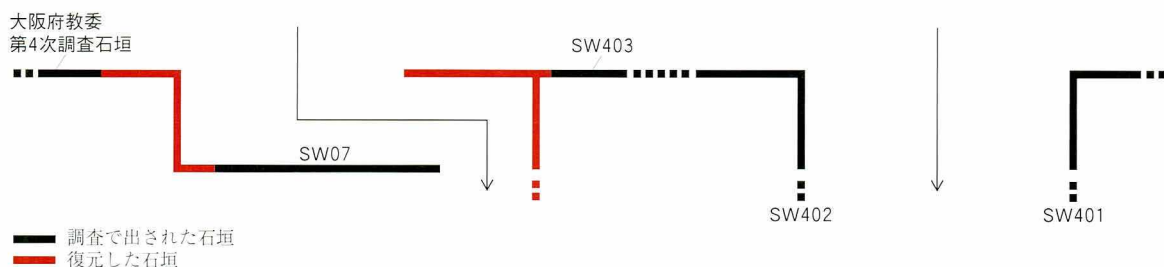


図7 三ノ丸北辺の石垣と虎口の復元案

の下に薄い平石を敷いて角度を調整し、角に稜線が通るように積上げられていることから、そこで石垣が終わっていたとも考えられる。また、南側には攪乱を受けた石垣石や裏込め石は確認されなかったことから、東端で直角に折れ曲り、南側に延びる可能性は考えにくい。SW07の東端が東や南に延びていないとすれば、SW403が東西方向でSW07と一部重なる程度まで西に延びていたとしても、南北で約5 mにわたり石垣が途切れていたことになる。一方、SW403がOS88-78次調査地西端と本調査地東端の2 m程度の間で、南側へ直角に折れ曲っていたとしても、東西で4 m以上にわたり石垣が途切れていたことになる。

このようにSW07と東西の石垣との接続部の形状を見てみると、SW401・402が南へ折れ曲っていた場所と同じく、SW07とSW403の間に虎口が存在したと考えるのが合理的であろう。そのばあい、北側から直進して進入することが可能な「平入り虎口」では防衛上問題があることから、図7のように東へ折れるか、あるいはさらに南へ折れなければ三ノ丸内に進入することができないような、より複雑な形状をした防備の固い虎口が構築されていた可能性もある。SW07が東西の石垣より5 m程度南に位置していることは、「折れ虎口」あるいは「内榊形虎口」を形成し、虎口から侵入してくる敵に対して横矢を効かせることを目的にしたものと考えられる。

一方、根石の基底面の標高を比較すると、SW07ではTP+4.5mであるのに対し、SW403ではTP+2.0m程度、大阪府教育委員会第4次調査地の石垣ではTP+2.4mであり、地中にあった部分を考慮しても、1 m以上の標高差がある。東トレンチ東壁断面でも第6層上面は南側ほど高いことから、SW07の前面とその東側の進入路は三ノ丸内に向かってスロープを形成していたと考えられよう。

ii) 徳川期の遺構

三ノ丸北辺の石垣と考えられるSW07の北側では、第4層の上面や層内で、水溜め遺構とみられるSX01・02、土壙SK05・06、性格不明の遺構SX03などを検出した。一方、調査区南東部では石組溝



写真10 SX01(北東から)



写真11 SX02(東から)

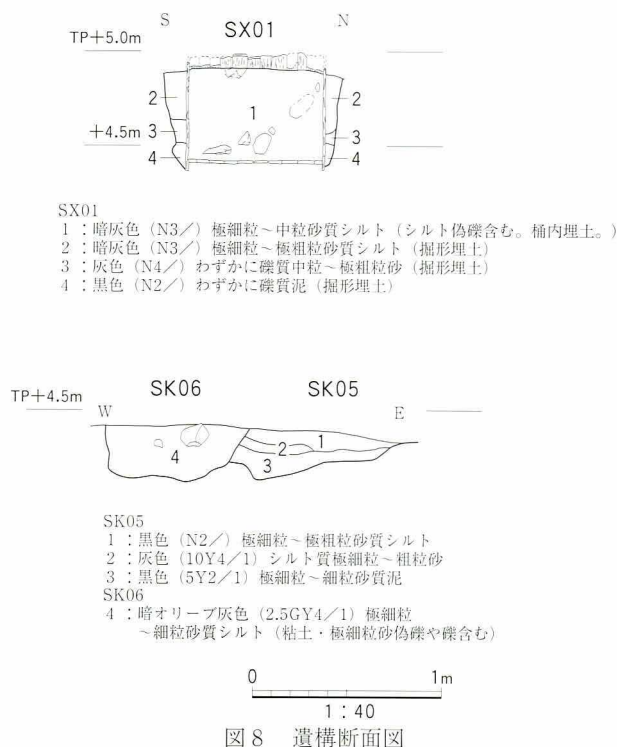


写真12 SX01出土の金箔押軒丸瓦

物が詰まっており、上面では蓋あるいは底板の一部が検出された。埋土を水洗選別した結果、土師器灯明皿、備前焼、瓦などの破片のほか、桃核やウリ科の種子などを回収した。

SX01は第4層上面で検出した遺構で、SW07の北約1mのところに位置している(図8、写真10)。穴に桶が据えられており、桶は短径0.72m、長径0.90mの楕円形で、深さは0.57mである。桶内の埋土は暗灰色極細粒～中粒砂質シルト層からなる。シルト偽礫を含み、人為的な埋戻し土と考えられる。掘形の埋土は暗灰色極細粒～極粗粒砂質シルト層、灰色わずかに礫質中粒～極粗粒砂層、黒色わずかに礫質泥層などからなる。このように桶を据えた遺構としては、OS83-15次調査で検出された大坂本願寺期のSK801、豊臣期のSK702・703などがあり、後2者は近接した位置に並んで設置されていた[大阪市文化財協会1988]。これらの遺構は底板が残存しており、井戸のような集水機能をもたないことから、雨水を溜める水溜め遺構や便所である可能性があるが、本遺構に関しては桶の内面や埋

とみられるSD04を検出した(図5)。

SX02は第4層内で検出した遺構である(写真11)。後述するSX01と同様に、穴に桶を据えた水溜め遺構と考えられるが、残存していたのは底板の一部や横木など、遺構の底部のみであった。底板の直上では土師器皿・焙烙、備前焼大甕、丹波焼播鉢、瀬戸美濃焼志野、肥前陶器溝縁皿、中国製青花・白磁、初期伊万里を含む肥前磁器染付、焼塩壺、丸・平瓦、木製箸、(古)寛永通寶4点、桃核など、本遺構に伴うとみられる遺物が多く出土している(図9)。2は完形の土師器皿である。

口縁端部の一部に煤が付着しており、灯明皿として用いられた可能性がある。7は丹波焼播鉢である。口縁は端部が段をなしており、内面は強いナデによって凹線状を呈している。播目は幅が2.5mm程度と太く、4本1単位の櫛目である。4・5は肥前陶器溝縁皿である。5はほぼ完形で、高台はいわゆる三日月高台である。内底面と高台端部の3箇所に砂目跡がある。SX02から出土したこれらの遺物は、17世紀前葉から中葉にかけてのものである。

SX03は第4層内で検出した浅い楕円形の遺構である(写真13・14)。長径は0.5mで、深さは0.1m程度である。SX03の内部には炭化

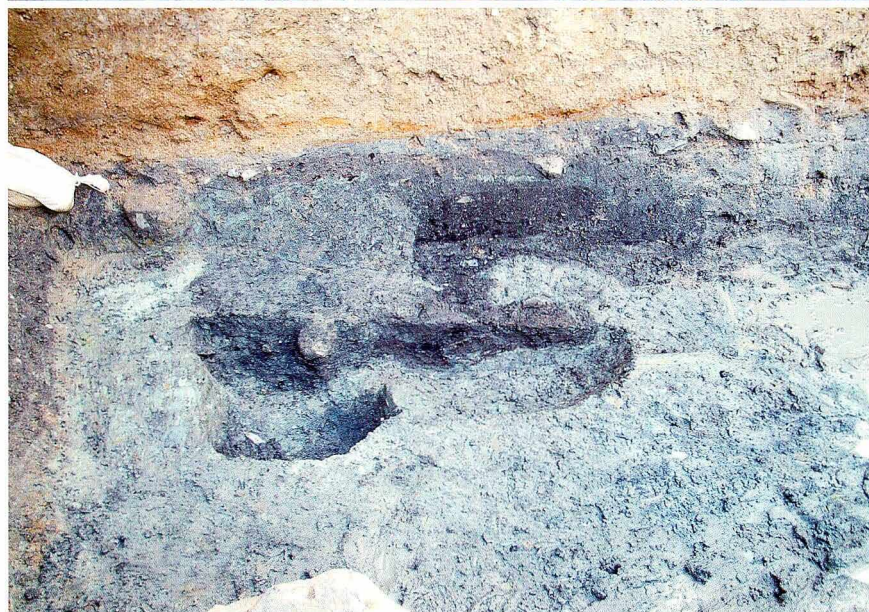
写真13 SX03検出状況
(北から)



写真14 SX03近景(北から)



写真15 SK05(右)・06(左)
(南から)



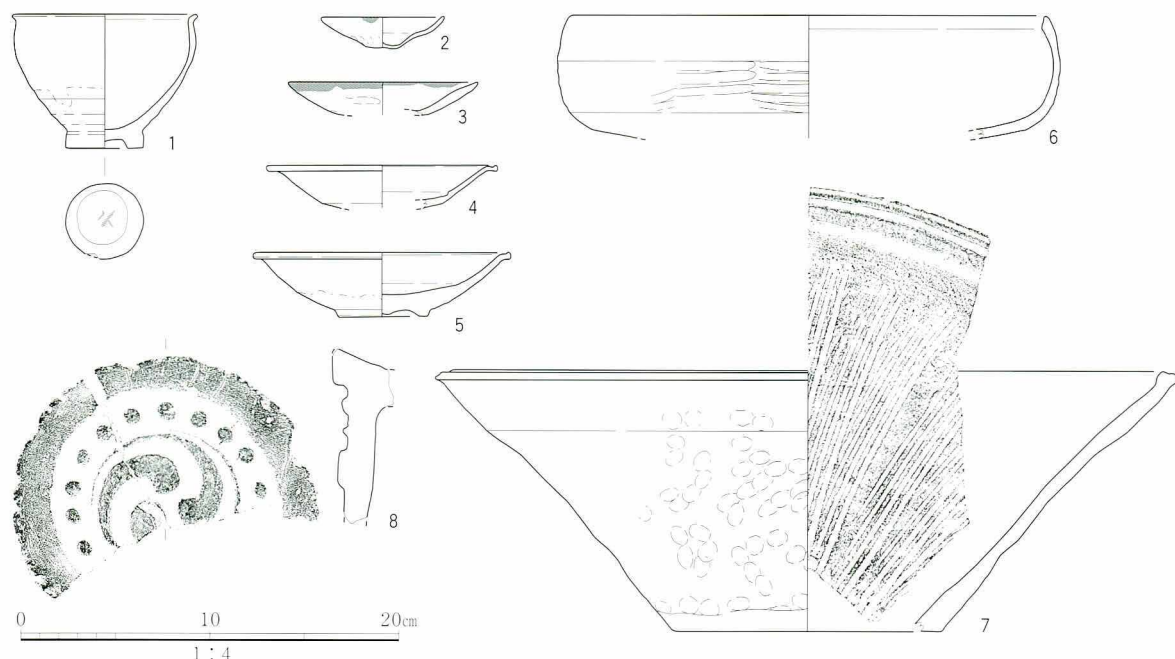


図9 出土遺物実測図(1)

SX01(桶内：1・8、掘形：3・6)、SX02(2・4・5・7)

土に便所遺構としての特徴が見られなかったことから、前者であると考えられる。

桶内の埋土からは土師器皿・焙烙、丹波焼播鉢、備前焼、肥前陶器碗、漆継ぎの痕跡が見られる中国製青花、近世丸・平瓦、(古)寛永通寶1点、漆碗、種実、礫などが出土している(図9・12)。1は内野山系の肥前陶器碗である。高台はいわゆる三日月高台で、高台内には墨書がある。8は豊臣期の金箔押軒丸瓦である(写真12)。巴文は左巻きで、珠文は18個に復元される。59は漆器碗で、内外面とも朱色である。一方、掘形の埋土からは土師器皿・灯明皿・焙烙、備前焼小壺、丹波焼播鉢、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、焼塩壺、丸・平瓦などが出土した。3は土師器皿である。口縁部には煤が付着しており、灯明皿として用いられたとみられる。6は土師器焙烙である。体部には平行タタキを施しており、外面には全面に煤が付着している。SX01から出土したこれらの遺物は豊臣期から17世紀中葉にかけてのものである。



写真16 SD04(北東から)

SK05・06は第4層上面で検出した円形あるいは楕円形の土壇である(図8・写真15)。SK05は直径1.0m、SK06は短径0.5m程度である。検出面からの深さはSK05が0.25m、SK06は0.30mである。SK05の埋土は黒色極細粒～極粗粒砂質シルト層、灰色シルト質極細粒～粗粒砂層、黒色極細粒～細粒砂質泥層などからなる。一方、SK06の埋土は暗オリーブ灰色極細粒～細粒砂質シルト層か

らなり、粘土・極細粒砂の偽礫や礫を含む。SK05からは肥前陶器、瀬戸美濃焼志野、瓦、木製箸・漆碗などが出土した(図12)。60は漆器碗である。内面は朱色、外面は黒色である。57・58は木製箸である。58は長さが23.4cmある。一方、SK06からは肥前陶器、瓦、木製箸などが出土している。

SD04は東トレンチの東側の第2層内で検出した石列である(写真16)。遺構の残りが悪く、帰属面や埋土の堆積状況などは不明であるが、石組溝の可能性はある。

3-3. 包含層出土の遺物

a. 第0層出土遺物(図11)

46は器種・産地不明の磁器片である。1937年、「偕行社」に隣接して建設された「大阪軍人会館」で使用されていたものであろう。

b. 第1層出土遺物

土師器皿・焙烙、備前焼播鉢、丹波焼播鉢、肥前陶器、肥前磁器白磁・染付、中国製青花、焼塩壺蓋、丸・平瓦、砥石など17世紀代の遺物が出土した。

c. 第3層出土遺物(図10)

土師器、瓦器、瓦質土器、常滑焼、備前焼、丹波焼播鉢、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、肥前磁器染付・色絵・青磁、中国製青花、ベトナム製陶器、軒丸・平瓦、貝類(アカニシ)など、17世紀中葉頃を中心とする遺物が出土した。12は土師器皿である。口縁部には煤が付着しており、灯明皿として用いられたものと考えられる。18は瀬戸美濃陶器天目碗である。21は肥前陶器碗である。31は肥前陶器鉢で、口縁端部を露胎としており、重ね焼きの痕跡が観察される。38はベトナム製長胴瓶である(写真18)。口縁端部は内側に肥厚し、広い面をもつ。口縁部直下には2条の、肩部には1条の沈線が巡る。胴部の内面にはロクロ目が残ри、凹凸が著しい。胎土は緻密であるが、少量の礫を含む。色調は灰オリーブ色を呈している。当地域では徳川初期に出土例が多く、その中に異なる2種類の粘土が練り込まれたとみられる資料が報告されているが[森穀1994]、今回出土した資料では灰オリーブ色と灰褐色の

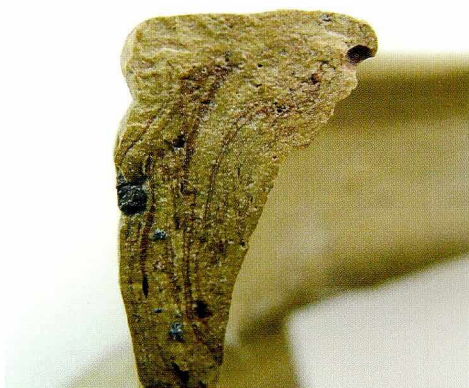


写真17 ベトナム製長胴瓶の口縁部断面

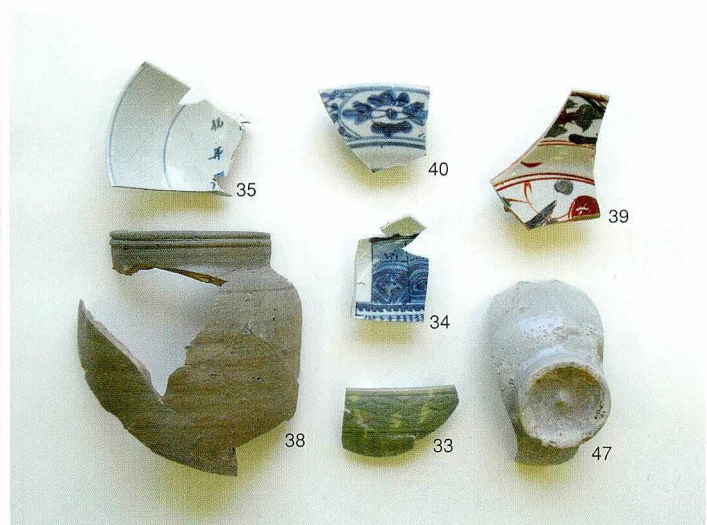


写真18 輸入陶磁器

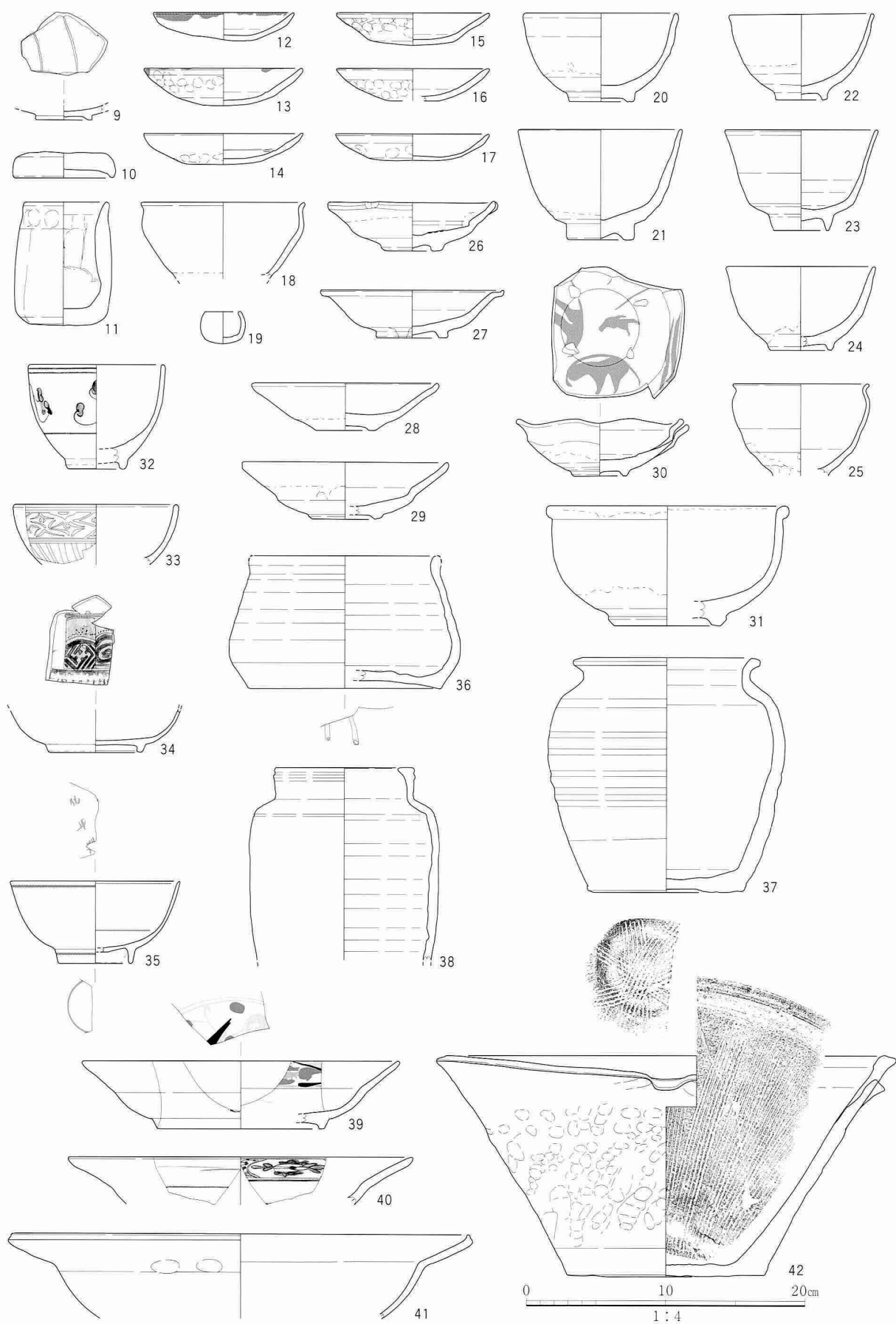


图10 出土遺物実測図(2)

第3層(10・12・18・21・31・34・38)、第4層(9・11・13~17・19・20・22~30・32・33・35~37・39~42)

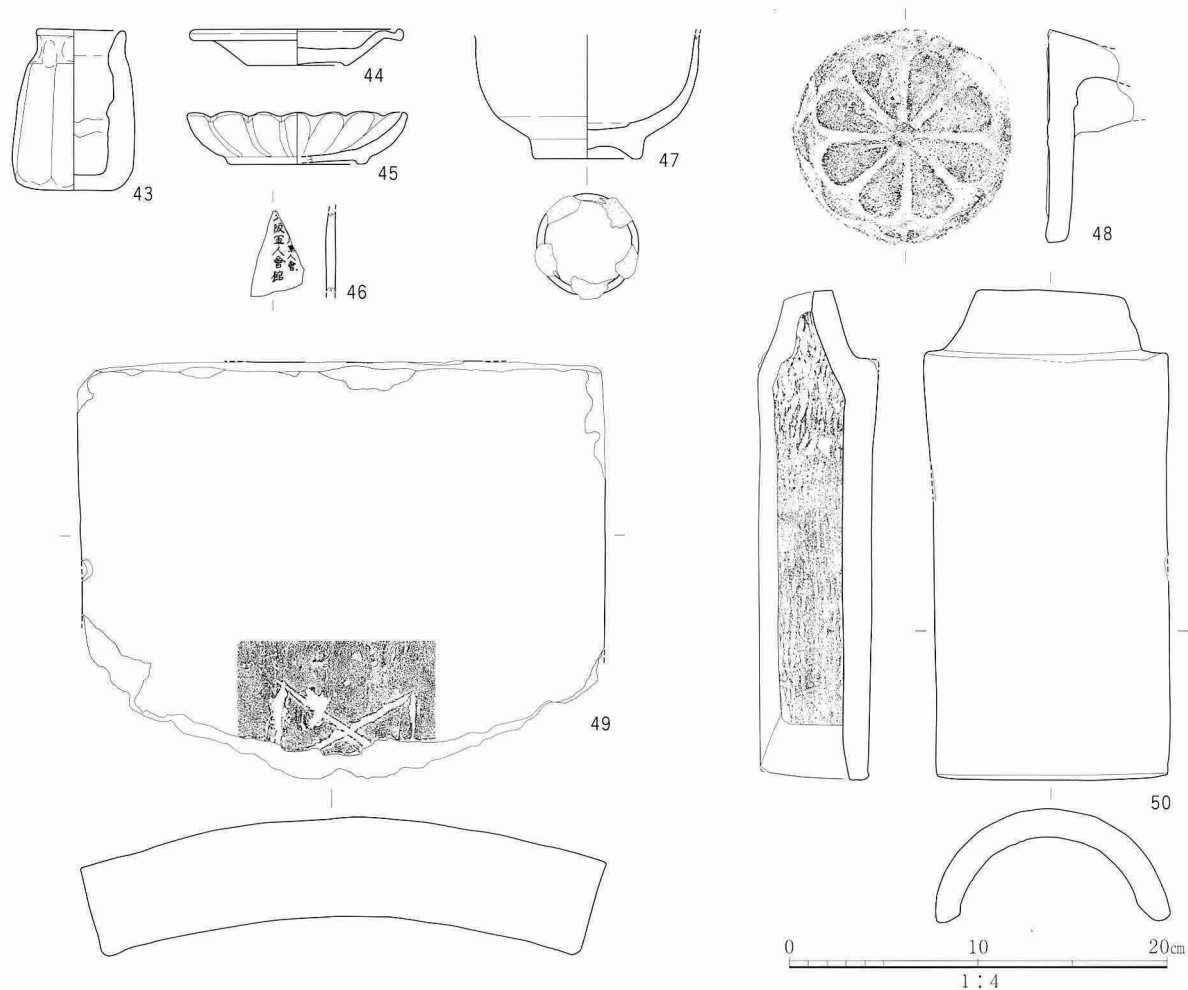


図11 出土遺物実測図(3)

第0層(46)、第4層(49・50)、第5層(48)、第6a～6b層(45)、6b層上面(43・44)、6c層(47)

胎土が縞状となっているようすが観察された(写真17)。34は中国製青花皿である。高台の端部から内部にかけては無釉である。10はほぼ完形の焼塩壺の蓋である。

d. 第4層出土遺物(図10～12)

土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、備前焼播鉢・建水、丹波焼播鉢、瀬戸美濃陶器、内野山系のものを含む肥前陶器、肥前磁器染付、中国製白磁・青磁・青花・色絵、土製小壺、焼塩壺、丸・平瓦、井戸瓦、石臼、キセル、木製下駄・箸・部材・漆碗、貝類(アカニシ)、種実、(古)寛永通寶2点など、おもに豊臣期から17世紀中葉にかけての遺物が多く出土した。

13～17は土師器皿である。13は口縁部に煤が付着しており、灯明皿として用いられたとみられる。41は土師器鍋である。豊臣後期前後に出土例が多く見られる。内外面とも全面に煤が付着している。9は瓦器碗である。12世紀後半から13世紀前半にかけてのものであろう。

36は備前焼の建水、37は壺である。ともに体部にはロクロ目が残り、下端部はヘラケズリを施している。36の底部外面には線刻がある。37の底部外面は未調整で、凹凸が著しい。42は丹波焼播鉢である。口縁部の内面は強いナデによって凹線状を呈しており、播目は7本1単位の櫛目である。内底面には重ね焼きの痕跡が観察される。

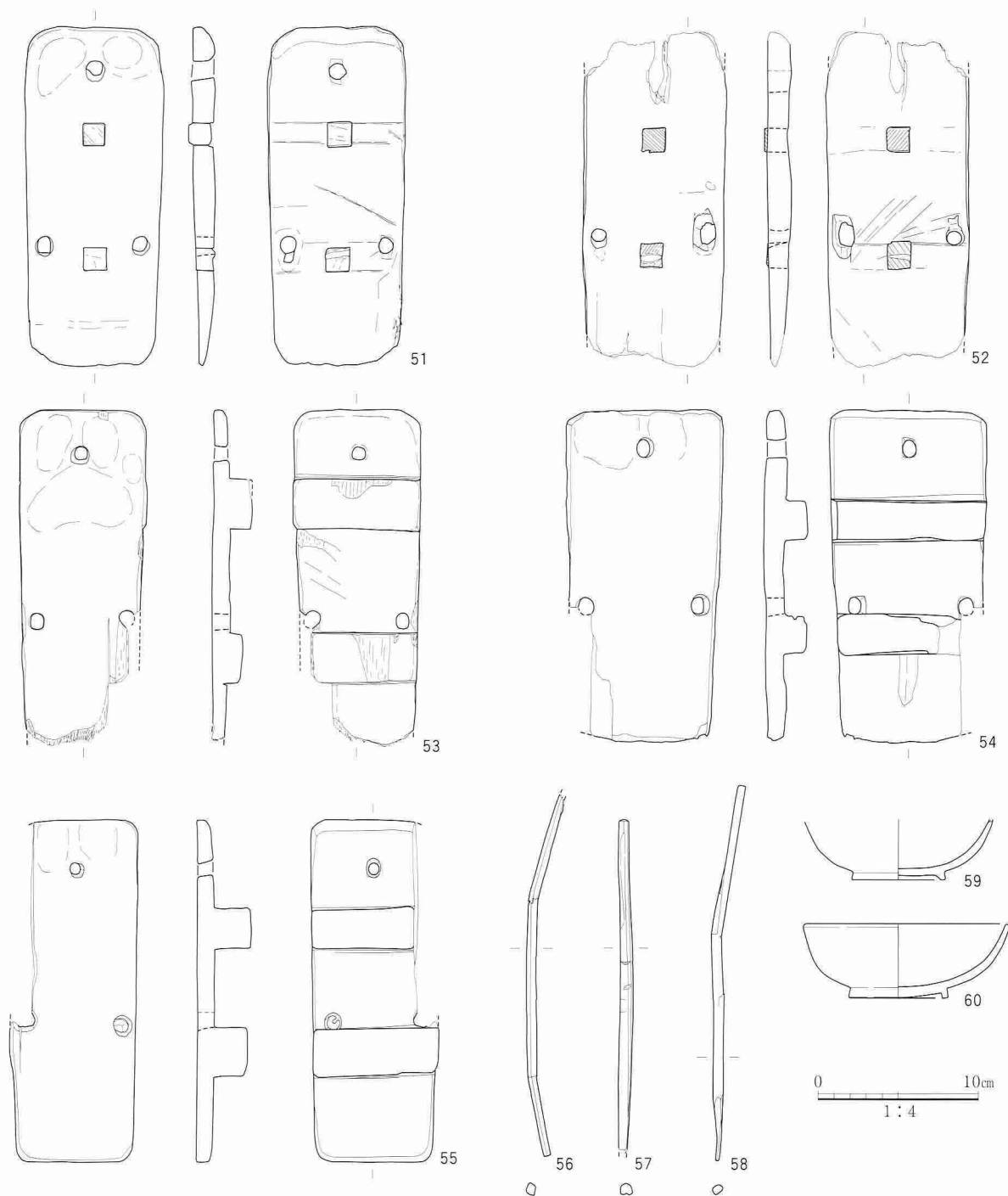


図12 出土遺物実測図(4)

SX01桶内(59)、SK05(57・58・60)、第4層(51～56)

20・22～25は肥前陶器碗で、20は本層最下部で出土したものである。23は内外面とも全面に施釉されており、高台端部には砂目跡がある。24の高台はいわゆる三日月高台である。25は器壁が薄く、釉薬は灰白色を呈する。17世紀中葉の内野山系のものとみられる。26～30は肥前陶器皿である。26は口縁部の3箇所をヘラ状工具で小さく折り曲げており、高台はいわゆる三日月高台である。体部内面には露胎の部分を作り、内底面と高台端部には輪状の砂目跡がある。27は溝縁皿で、内底面には3箇所に砂目跡がある。28は内底面と高台内に砂目跡が、29の内底面には胎土目がある。30は口縁部

に歪みを加えており、内面には鉄絵が施されている。

33は龍泉窯系のものとみられる中国製青磁碗である。35・40は中国製青花の碗と粗製の皿である。39は粗製の中国製色絵皿である。高台の端部から内部にかけて、多量の粗い砂が付着している。32は肥前磁器染付碗である。17世紀前半の初期伊万里で、内底面には釉切れが観察される。19は完形の土製玩具で、いわゆる「つぼつぼ」と呼ばれているものである。口縁端部は水平な面をなしている。胎土はきわめて精良で、色調は灰白色を呈する。11は完形の焼塩壺である。体部外面はタテ方向の強いナデにより、面取りぎみとなっており、内面には工具痕や粘土紐のつなぎ目が観察される。

50はほぼ完形の丸瓦である。凹面には粗い布目が観察される。49は井戸瓦である。凸面はタテ方向、凹面はヨコ方向のナデで調整しており、凸面の中央部には記号とみられる線刻がある。53～55は一本下駄である。いずれも連歯下駄に分類される。55の右側の横緒孔には鼻緒の一部が残存している。51・52は近接して出土した木製の構造下駄で、一对のものである可能性がある。露卯下駄に分類され、2箇所 の柄孔には差歯の柄が残存している。52は柄の一方に楔を打込んで補修したとみられる痕跡がある。56は木製箸である。

e. 第5層出土遺物(図11)

土師器、丹波焼甕、備前焼播鉢、瀬戸美濃陶器、中国製青花、漆継ぎの痕跡がある中国製白磁、軒丸・平瓦、貝類(サザエ)など、豊臣期を中心とする遺物が出土した。そのほか肥前磁器白磁碗が1点出土しているが、混入とみられる。48は菊丸瓦である。一重が8弁の二重菊である。

f. 第6a～6b層出土遺物(図11)

土師器、須恵器、常滑焼、備前焼、丹波焼、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、中国製青花、焼塩壺、丸・平瓦など、豊臣期を中心とする遺物が出土した。45は瀬戸美濃焼志野菊皿である。これまで、大坂城・城下町における瀬戸美濃焼志野の出現期を豊臣後期の中に求める見方が一般的であったが[松尾信裕1993ほか]、今回出土した志野菊皿が混入でないとすれば、1598(慶長3)年から翌年にかけての三ノ丸造成に関連した盛土層に伴うこととなり、もっとも時期の遡る出土例の一つとして注目される。44は第6b層上面で出土した瀬戸美濃焼の灰釉折縁皿である。内底面に鉄釉を施しており、削込みの高台内には輪トチの痕跡がある。43は同じく第6b層上面で出土した完形の焼塩壺である。体部外面がタテ方向の強いナデにより、面取りぎみとなっており、内面には工具痕や粘土紐のつなぎ目が観察される。

g. 第6c層出土遺物(図11)

須恵器、李朝白磁のほか、北宋銭あるいはその模鑄銭である治平元寶1点が出土した。47は中央トレンチ掘削中に出土した李朝白磁碗で、本層に属するものとみられる。内外面とも全面に施釉されており、高台端部には5箇所 に砂目跡がある。

h. その他

重機掘削中に寛永通寶が1点出土しているほか、事業者側の工事中に一石五輪塔の一部とみられる石製品が見つかった。

4. 石垣の石材について

ここでは石垣SW07に使用されていた石材の鑑定結果について報告する。

a. 調査方法

石垣に使用された石材の岩種を判定するため、石垣石・目地石については肉眼によって岩質の異なるものを選択し、裏込め石は表面の付着物が多いもの、あるいは焼けているとみられたものを選択してサンプリングした。観察はサンプリングした石材を持ち帰り、実体顕微鏡によって鉱物の種類と組成、色とその特徴、形状や大きさに留意して行った。

b. 肉眼および実体顕微鏡観察結果

鑑定した石垣石は13個体、目地石は5個体で、裏込め石は9個体である。その結果、石垣石に用いられた石材は花崗岩が8個体、砂岩が5個体で、目地石は花崗岩と砂岩が各々2個体、チャート礫が1個体であった。裏込め石は花崗岩が1個体、砂岩が3個体、石英礫が2個体、チャート礫が3個体であった。以下に、代表的な石材の特徴を記す。なお、SW07西半の裏込め石から採取した試料40～43を除く各試料の母石を写真27・28と図6に、各試料の石材鑑定結果を表1に、代表的な石材の近接写真を写真19～26に示す。

花崗岩 花崗岩はすべて黒雲母花崗岩であった。試料11は黒雲母の弱い定向配列が見られるもので、試料19は石英がめだち、試料28は粗粒部と細粒部(アプライト)の接触部が見られる黒雲母花崗岩であった。試料35は桃色のカリ長石が特徴的な黒雲母花崗岩であった。

砂岩 灰色ないし暗灰色を呈する非常に硬質な中～粗粒砂岩が主体をなす。試料21はフレーザー状に泥岩(頁岩)のクラストが挟まれている。また、泥岩(頁岩)クラストの有無にかかわらず、砂岩はすべて同様な岩相を示すことから同種のものとみられる。試料34は表面が赤褐色に変色しており、長石の変質が表面ほど強い。火を受けているものとみられる。

石英礫 亜円礫ないし亜角礫である(写真24参照)。

チャート礫 石英礫と同様に、亜円礫である(写真23参照)。

c. 石材の産地について

鑑定した石材で特徴的な岩相を示すものに、桃色のカリ長石が特徴的な黒雲母花崗岩がある。近畿地方ではこの特徴を有する花崗岩に、山陽帯に属する六甲花崗岩、北摂地域の剣尾花崗岩体や茨木複合花崗岩体の妙見岩体、播磨花崗岩、領家帯の新期花崗岩に属する滝尻アダメロ岩、近木川花崗岩、東山寺花崗岩、山陰帯に属する和田山花崗岩などがある。試料35はおもな構成鉱物が石英・斜長石・カリ長石・黒雲母で角閃石を含まないこと、等粒状組織が見られること、粒状の石英が含まれること、片状構造や片麻状構造が認められないことなどの特徴から、上記の花崗岩体のうちの北摂地域に分布する岩体と思われる。

砂岩は、奈良県北部および京都市東部から近畿地方中～北部にかけて広く分布する丹波帯、大阪南部の和泉山脈を構成する和泉帯(和泉層群)、和歌山県から三重県南部にかけて広く分布する四万十累帯や秩父累帯に分布する。このうち、泥岩(頁岩)クラストが観察されるものに、たとえば京都府亀岡

石垣石・目地石

表 1 各試料の石材鑑定結果

試料 No.	岩種	特徴	備考
01	粗～中粒黒雲母花崗岩	黒雲母がクロット状に産出	
02	粗粒黒雲母花崗岩	黒雲母が弱い定向配列する(試料19と同質)。石英が集合している。	
06	砂岩	泥岩(頁岩)のクラストが観察。細粒、灰色。	
11	粗粒黒雲母花崗岩	黒雲母がクロット状に産出する 弱片状の構造が見られる(試料36と同質か)	(古期領家か)
17	細粒黒雲母花崗岩	黒雲母が定向配列する	(試料20と岩相はよく似ているが、カリ長石が桃色でないの で同質ではない。)
18	砂岩	細粒、灰色	
19	粗粒黒雲母花崗岩	石英が集合している	
20	中粒黒雲母花崗岩	カリ長石が淡桃色で、半自形～自形である	
21	砂岩	試料06と同質。細粒、灰色。	
25	砂岩	試料06や試料21と同質。泥岩(頁岩)のクラストが観察。 細粒、灰色。	
26	砂岩	試料29と同質。方解石脈が見られる。泥岩(頁岩)のクラストが観察。 細粒、灰色。	目地
27	中粒黒雲母花崗岩	黒雲母の弱い定向配列が観察される	目地
28	粗粒黒雲母花崗岩と細粒黒雲母花崗岩との接触部	亜角礫	目地
29	砂岩	試料26と同質。方解石脈が見られる。細粒、灰色。	目地
35	粗粒黒雲母花崗岩	桃色のカリ長石がめだつ(北摂の山陽帯か?)。 0.5cmほどの石英があって、長石よりめだつ。	
36	粗粒黒雲母花崗岩	弱片状の構造が見られる。黒雲母がクロット状に産出。 0.8cmほどの長石あり(試料11と同質か)。	
37	砂岩	細～中粒、灰色	
38	チャート	亜円礫	目地

裏込め石

試料 No.	岩種	特徴	備考
30	石英	亜角礫。土壌や炭の付着が見られる。	
31	チャート	亜円礫(φ17×12×11cm)	
32	石英	亜円礫(φ12×8×4cm)(石英脈の一部か)	
33	チャート	亜円礫(φ17×9×7cm)	
34	砂岩	表面が赤色に焼けている。亜円礫。細粒、灰色。	
40	チャート	付着物はあるが、自身は焼けていない	
41	砂岩		
42	砂岩		
43	粗粒黒雲母花崗岩	カリ長石含有?(焼けてピンクになっているのか?)	

地域に分布する丹波帯の年谷川コンプレックスの砂岩がある。基質部の岩相はこの砂岩に類似するが、偏光顕微鏡による詳しい観察を行っていないことと、泥岩(頁岩)クラストの検討が不十分であることから、ここでは産地候補の一つになる可能性を指摘するにとどめることにする。

d. 既存調査で検出されている石垣の石材について

前述のように、今回の調査で検出した石垣SW07の続きと考えられる石垣がこれまでの調査でも検出されている。この中で、OS83-15次調査で検出されたSW501では生駒山系・六甲山系花崗岩とともに丹波層群砂岩が石垣石として用いられており、OS88-78次調査のSW403では花崗岩、花崗閃緑岩や流紋岩が、大阪府教育委員会第4次調査(今回の調査地の西隣)の石垣では第1次調査(第4次調査の西隣)に比べて丹波層群砂岩が石材として多く利用されていたことが報告されている[大阪市文化財協会1988・2002、大阪城天守閣1993]。SW07で用いられていた石材も花崗岩のほか砂岩がめだって使用されており、前述の大阪府教育委員会第4次調査地の石垣との共通点が見られた。



写真19 試料11



写真20 試料19

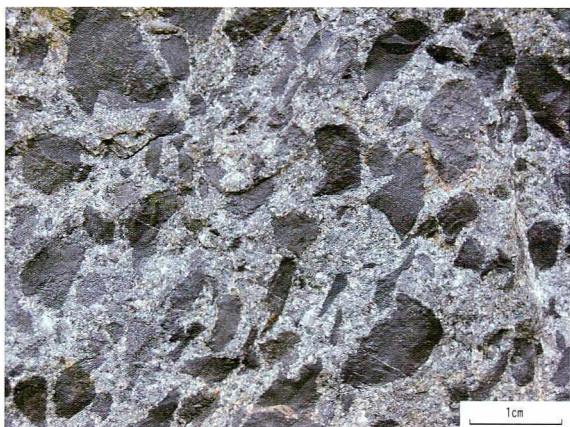


写真21 試料21



写真22 試料28



写真23 試料31



写真24 試料32

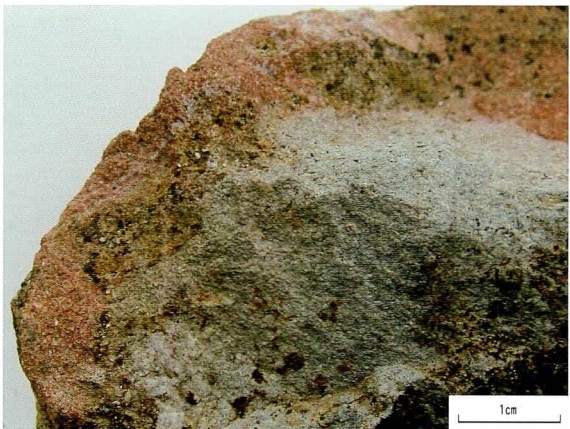


写真25 試料34(焼けている状況)

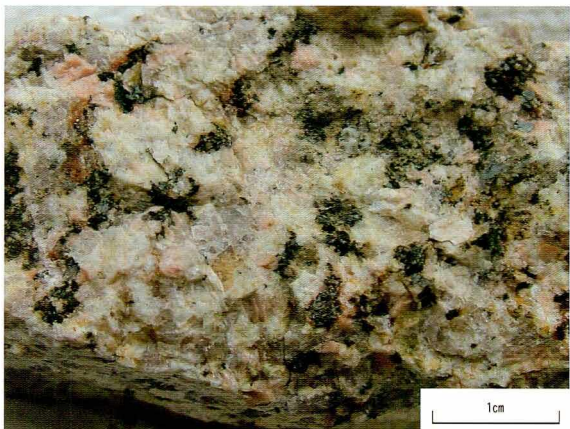


写真26 試料35

e. 石材鑑定のまとめ

今回行った石垣の石材鑑定結果をまとめると、以下のようになる。

- ① 鑑定した全石材のうち、石垣石は黒雲母花崗岩と砂岩のみで構成されているのに対し、目地石や裏込め石にはチャートと石英の礫も含まれていた。
- ② 黒雲母花崗岩類のうち、**試料35**はその特徴から北摂地域に分布する岩体のいずれかと推定される。なお、その他の花崗岩類については未検討である。
- ③ 砂岩はフレーザー状の泥岩(頁岩)クラストが特徴的に観察された。この特徴を有するものに、たとえば丹波帯の年谷川コンプレックスがあるが、ここでは候補の一つになる可能性の指摘にとどめた。

謝辞 石材鑑定に際し、大阪市立自然史博物館川端清司氏より貴重な御教示を賜った。記して謝意を表する。

参考文献

松浦浩久・栗本史雄・寒川旭・豊遙秋1995、「広根地域の地質」：『地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)』 地質調査所
宮地良典・楠利夫・武蔵野實・田結床良昭・井本伸広2005、「京都西南部地域の地質」：『地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)』 産総研地質調査総合センター
宮地良典・田結床良昭・寒川旭2001、「大阪東北部地域の地質」：『地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)』 地質調査所

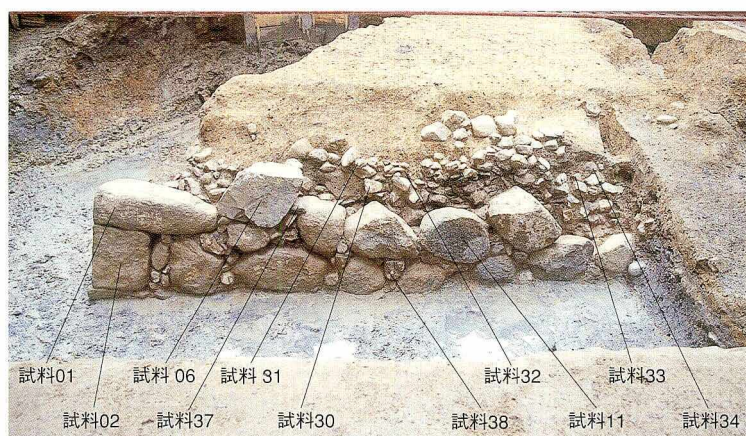


写真27 SW07東半の採取試料



写真28 SW07西半の採取試料

5. まとめ

今回の調査では石垣や水溜め遺構など、豊臣期から徳川期にかけての遺構が検出された。そのうち、東西12mにわたって検出された石垣SW07は、築造方法や地層などの検討から、周辺の調査で見つっている豊臣氏大坂城三ノ丸北辺の石垣の続きであると考えられる。SW07が東西両隣の調査地で検出された石垣の延長線より約5m南側に位置していること、東端が調査区内で途切れていたとみられることなども明らかとなり、SW07の東側に三ノ丸へ進入するための虎口が存在していた可能性が高くなった。また、石垣石や裏込め石から採取した剥片を分析し、豊臣期の他の石垣と同様に、花崗岩や砂岩など複数の石材が使用されていることを確認した。目地石や裏込め石には石垣石と異なる石材も使用されており、両者の石材の選択方法や調達方法の差異について、今後研究を進めていく必要がある。一方、石垣の前面では桶を利用した水溜め遺構や土塀など徳川初期の遺構が検出されている。こうした遺構や包含層からは陶磁器、瓦、木製品、金属製品など豊臣期から徳川期を中心とする多くの遺物が出土した。陶磁器には中国・朝鮮・ベトナムから輸入されたものが含まれているほか、木製品には下駄や箸が多く見られる。金箔押軒丸瓦は調査地周辺の武家屋敷などで使用されたものであろう。

このように、今回の調査ではおもに豊臣氏大坂城三ノ丸北辺に築造された石垣の構造に関する新たな知見が得られたが、今後東西の石垣と接する部分をはじめ周辺の調査が進展すれば、虎口の詳細な形状や、他の虎口との関係などについてもより踏込んだ議論が可能になるものと期待される。

註)

(1)大阪府教育委員会宮崎泰史氏のご教示による。

参考文献

大阪市文化財協会1988、『大坂城跡』Ⅲ

2002、『大坂城跡』Ⅵ

2007、『大坂城跡』Ⅷ

2008、『平成19年度大坂城整備事業に伴う大坂城跡発掘調査(OS07-12)報告書』

大坂城天守閣1993、『特別展大坂城下町』

追手門学院校地学術調査委員会1982、『大坂城三の丸跡』

黒田慶一2005、「大手前一丁目所在遺跡(大坂城跡)」：大阪市史編纂所・大阪市史料調査会編『新修大阪市史』史料編第一巻、考古資料編、pp.402-409

徳川時代大坂城外郭関連石垣遺構発掘調査団1977、『徳川時代大坂城外郭関連石垣遺構調査報告』

松尾信裕1993、「大坂出土の桃山陶磁」：土岐市美濃陶磁歴史館編『大坂出土の桃山陶磁』、pp.31-37

宮崎泰史1993、「ドーンセンター建設に伴う大坂城跡の調査」：『大阪府下埋蔵文化財研究会(第27回)資料』、pp.65-

71

宮本佐知子1989、「「淀屋」?の蔵跡みつかる」：大阪市文化財協会編『葦火』19号、pp.6-7

森穀1994、「ベトナム長胴瓶」：土岐市美濃陶磁歴史館編『大坂出土の桃山陶磁』Ⅱ、p.65

報 告 書 抄 録

ふりがな		おおさかじょうあと9						
書名		大坂城跡Ⅸ						
編著者名		池田研・小倉徹也						
編集機関		財団法人 大阪市文化財協会						
所在地		〒540-0006 大阪市中央区法円坂1－1－35 TEL 06-6943-6833						
発行年月日		西暦 2008年6月30日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
おおさかじょうあと 大坂城跡	おおさかし 大阪市 ちゅうおうく 中央区 おおてまえ 大手前	27128	一	34° 41′ 03″	135° 31′ 43″	20071221 ～ 20080131	135m ²	追手門学院による 建設工事に伴う
所収遺跡名	種別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		
大坂城跡	城下町	安土桃山時代		石垣		陶磁器・金箔押瓦・銭貨		
	城郭	江戸時代		土塀・水溜め遺構		陶磁器・瓦・木製品・銭貨		

大坂城跡Ⅸ

ISBN978-4-86305-009-9

2008年6月30日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 ヨシダ印刷株式会社 大阪営業所

〒532-0003 大阪市淀川区宮原5-1-18

